



# 日本ラテンアメリカ学会 会 報



2023年11月30日

No. 142

## 1. 理事会報告

### ○第176回理事会

2. 第45回定期大会の開催と発表者募集のお知らせ
3. 地域研究部会開催案内
4. 『ラテンアメリカ研究年報』第44号の原稿募集について
5. 新刊書紹介
6. 事務局から

## 1. 理事会報告

### ○第176回理事会

日 時：2023年9月30日（土）15:00～17:00

場 所（開催方法）：Zoomを使用したオンライン会議

出席者：浅香、石田、磯田（書記）、岩村、宇佐見、大越、奥田、上、岸川、久野、小池、  
後藤、近田、田村、北條、舩方、松尾、宮地、村上（理事長）、本谷

### 〈審議事項〉

#### 1. 第45回定期大会

本谷理事より、第45回定期大会について、2024年5月25日および26日に慶応義塾大学日吉キャンパスで開催することが提案された。当日学内で他のイベントが実施されるものの、大会用の教室は確保済みである。前回定期大会理事からの引継ぎも夏休み中に完了し、松尾理事の協力もあって大会用のHPも準備できている。基調講演の招待者やシンポジウムのテーマについては調整中である。審議の結果、これを承認した。

#### 2. 地域合同研究部会

舩方理事より、地域合同研究部会について、2024年4月6日（土）もしくは13日（土）の開催が提案された。小池理事より、新入生にも周知する期間を確保するため、4月中旬以降が良いとの提案がされた。村上理事長からも、早期キャリア研究者は地域合同研究部会と定期大会で同じ報告内容となっても良いため、開催時期を遅くすることが提案された。審議の結果、4月13日（土）に東京外国語大学本郷サテライトキャンパスにおいて、対面とオンラインのハイブリッド形式で開催することが承認された。

### 3. 入退会の承認

舛方理事より、入会3名、退会3名、会員種別変更1名が提案され、これを承認した。

### 4. ウェブサイトの改訂

石田理事より、以下三点のウェブサイト変更をシストランス社に依頼することが提案された。一点目は、ウェブサイトの名称を「研究部会」から「地域部会」に名称を変更すること、二点目は「若手支援制度」から「早期キャリア支援制度」に名称を変更すること、三点目はJ-Stageにおける年報公開について広報するためのバナーを新設することである。一、二点目の変更そのものはすでに決定しているため見積り額が、三点目は変更内容とその業者委託の如何も含めて審議された。三点目については、年報担当理事およびウェブサイト担当理事より、J-Stageで公開することを会員にメールで通知した上で、現在記載されているバックナンバー全号公開の断り書きを削除することが提案された。また、年報担当理事より、年報に掲載された全ての論文のPDFをHPから削除し、J-Stageに一本化することが提案された。ウェブサイト担当理事より、PDFの全てを削除するのに時間とアルバイト代がかかると補足説明があった。なお、三点目を業者委託せずウェブサイト担当理事が担当する場合、費用は5,000円抑えられる（一箇所の変更作業につき単価5,000円）ものの、J-Stageへのリンクが目立たなくなるという懸念が共有された。また、作業をシストランス社に頼む場合は変更箇所の数に関わらず基本作業料金15,000円がかかるため、複数変更がある場合は、同時に頼んだほうが良いのではないかと提案された。

審議の結果、三点全てを、提示した見積りの金額でシストランス社に依頼することが承認された。また、ウェブサイトには目次のみを残すこととし、現在はPDFとして公開されていない年報の編集後記も事務局・ウェブサイト担当理事が追加でJ-Stageに掲載することで、バックナンバーに掲載されている全てのPDFを削除することが承認された。なお、今まで刊行後1年後に公開されていた年報については、完全オンライン化に伴い、今後は即日公開されることが確認された。

### 5. 早期キャリア研究者支援（国際交流）

岸川理事より、「若手研究者」という名称の全てを「早期キャリア研究者」に置き換えると、概念上の整合性が保てなくなるため、「若手支援」ではなく「国際学会助成」に変更すること、ならびに海外在住の早期キャリア学会員が日本で開催される国際学会で研究発表する場合も支援の対象にすることが提案された。審議の結果、これが承認されたため、今後ウェブサイト改訂の際に反映させることとなった。

### 6. 優秀論文賞の募集と審査

舛方理事より、優秀論文賞の募集と審査について、10月2日から応募を受け付け、次回の理事会までに選考、承認する審査スケジュールが提案された。次回（第4回）以降の優秀論文賞の募集では推薦（自薦・他薦）の制度を廃止し、年報に掲載された論文が自動的に候補となる。舛方理事からは、次期理事会における優秀論文賞の担当をどの理事が行うのがよいか問題が提起され、年報論文の査読者と優秀論文賞の審査委員が重なることは好ましくないため、査読者を把握する年報担当理事が担当する案もあるが、最終的には理事長に判断を委ねることが提案された。村上理事長からは、選考過程の透明性を厳密にするためには理事会が理事とは関係ない学会員を指名し、選考委員を立ち上

げる学会もあるとの情報が共有された後で、審議の結果、詳細は次回の優秀論文賞の審査を担当する次期理事会で検討してもらうことで決定した。

## 7. 理事選挙および選挙管理委員会

舛方理事より、2024年の理事選挙について、前回と同様にウェブ選挙を実施し、国際文献社に運営支援を依頼することが提案された。審議の結果、選挙管理委員会の発足と理事選挙の実施が承認された。なお前回の選挙では不正アクセス疑惑等の安全面に配慮して開票作業は対面で行われたが、今後の運営方針は次期選挙管理委員会に委ねることが提案された。

## 〈報告事項〉

### 1. 会計

近田理事より、別紙を用いて、第44回定期大会の会計について報告された。同大会の託児補助の利用者は3名、託児所ができたため久しぶりに学会参加が叶ったという感謝の意見が寄せられたという情報が共有された。また、託児所代は速やかに振り込めるように、定期大会費用とは別品目で設定していることが報告された。今後の定期大会時の託児所の担当については、各大会の事情に応じて決定される。

なお、インボイス制度については、学会が営利団体ではなく任意団体であるため、インボイス制度の登録は義務ではないとの確認があった。インボイス制度については今後必要に応じて対応することになる。

### 2. 会報

磯田理事より、別紙を用いて、新刊紹介3冊は全て早期キャリア研究者に依頼中であることが報告された。

### 3. 年報

奥田理事より、別紙を用いて、宮地理事が中心に編集された年報第43号が無事に刊行されたこと、ウェブサイト上の年報の説明に、①完全電子化されたこと、②年4回発行されること、③通し番号が付与されること、④参考文献欄の電子書籍の記入方法についての以上4点が追記されたこと、9月末締め切り分については既に原稿数本の応募があったことが報告された。

### 4. 地域研究部会

東日本研究部会について、上理事より、12月2日の実施を予定しており、10月27日まで報告希望を受け付けていることが報告された。

中部日本研究部会について、小池理事より、12月15日の実施を予定しており、11月16日まで報告希望を受け付けていることが報告された。なお、希望者がいない場合は、報告希望の締切を延長する予定である。

西日本研究部会について、北條理事より、11月11日の実施を予定していることが報告された。なお、希望者がいない場合は、2024年1月に延期する予定である。

### 5. ウェブサイト・ニュース配信

石田理事より、別紙を用いて、①前回理事会以降9月25日までの間に22本のニュースを配信したこと、②前号会報をウェブサイトに掲載したこと、③年報担当理事の依頼を受けて、研究年報の電子化についての案内を掲載したことを加筆したと報告された。

最後に、次回理事会開催を2024年1月8日（月・祝）15:00開始とすることを確認して散会した。

## 2. 第45回定期大会の開催と発表者募集のお知らせ

第45回定期大会は、2024年5月25日（土）および26日（日）の2日間、慶應義塾大学を主催校として開催します。東急東横線・目黒線の日吉駅を最寄りとする日吉キャンパスを会場として対面開催を予定しています。基調講演は、海外からゲストを招聘すべく現在交渉中です。シンポジウムは、プロレス／ルチャリブレをテーマとし、メキシコと日本の現場に詳しいゲストをお招きして、プロレス／ルチャリブレを通してラテンアメリカおよび日本について考察するものとして準備中です。会員の皆さまの奮ってのご参加をお待ちしております。報告をご希望の方は、2024年1月6日（土）までに、第45回定期大会ポータルサイト（[www.ajel2024.blogspot.com](http://www.ajel2024.blogspot.com)）の「報告を希望される方へ」ページをご確認の上、記載されているフォームから必要事項を記入してお申し込みください。なお、一般参加に関しては後日別途ご案内いたします。

### 1. 個別研究報告の申し込み

個別研究報告を希望される方は、ポータルサイトの「報告を希望される方へ」ページ内「個別研究報告申し込みフォーム」バナーをクリックし、報告者の氏名と所属機関名、報告タイトル（欧文含む）、討論者などの必要事項を記入した上で「送信」をクリックしてください。報告要旨は200～250字（欧文100～120 words）としてください。個別研究報告には討論者がつきますので、希望する討論者の氏名（複数可）の入力にご協力ください。討論者への依頼と最終選定は大会実行委員会が行います。なお、報告者、討論者ともに日本ラテンアメリカ学会の会員に限ります。

### 2. パネルの申し込み

パネルでの参加希望も大いに歓迎します。パネルの代表者はポータルサイトの「報告を希望される方へ」のページ内「パネル申し込みフォーム」バナーをクリックし、パネル代表者の氏名と所属機関名、パネルのタイトルとその概要、および各報告者・討論者の氏名と所属機関、報告タイトル（欧文含む）などの必要事項を記入した上で「送信」をクリックしてください。パネル概要は400～600字（欧文200～300 words）を目安としてください。司会、報告者および討論者の人数や時間配分はパネル代表者の責任のもとで決定してください。パネルの持ち時間は120分です。司会者、報告者、討論者は原則として日本ラテンアメリカ学会会員とします。ただし、パネルの趣旨にあい、構成上不可欠と判断される場合には非会員の参加も認められます。その場合には、非会員を加える理由をつけてお申し込みください。非会員の参加1名につき、代表者から1,000円をお支払いいただきます。

### 3. 託児所の利用について

本大会では、大会会場内に大会参加者専用の託児室を開設（専門業者に運営を委託）する予定です。詳細が決まりましたら、定期大会ポータルサイトや学会ニュースのメール配信でお知らせいたします。報告の有無にかかわらず、大会に参加される本学会員は事前申し込みの上でご利用していただけるよう、準備を進めていく所存です。

### 【大会までのスケジュール】

- ・2024年1月6日（土）：報告申し込みの締切
- ・2月中旬：報告申し込みの採否通知
- ・3月23日（土）：報告要旨締切日（書式等の詳細は追ってご連絡します）
- ・5月5日（日）：報告ペーパーの締切日（書式等の詳細は追ってご連絡します）

個別報告とパネルのいずれにおいても、報告者は事前に報告ペーパーを提出していただきます。ご提出いただいたペーパーは、第45回定期大会開催日をはさむ前後2週間程度、パスワードを設定した上でポータルサイトからアクセス可能な状態にする予定です。

多数の会員の皆さまの報告へのご応募、ならびに大会へのご参加をお待ちしております。大会の詳細につきましては、随時定期大会ポータルサイトや学会ニュースのメール配信でお知らせいたします。どうぞよろしくようお願い申し上げます。

### 【実行委員会連絡先】

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1

慶應義塾大学 商学部 川上英研究室

日本ラテンアメリカ学会 第45回定期大会実行委員長 川上英

メールアドレス：ajeltaikai2024@gmail.com

ポータルサイト：www.ajeltaikai2024.blogspot.com

## 3. 地域研究部会開催案内

### 〈東日本研究部会〉

日本ラテンアメリカ学会東日本研究部会では、以下の要領で研究会を開催いたします。

つきましては、研究報告を募りますので、ご応募ください。Zoomによるオンライン開催となります。

### 【日時】

2023年12月2日（土）13:30～

### 【募集内容】

東日本部会が主催しますが、報告者の居住地は問いません。研究成果報告のほか、研究途中報告、現地報告、研究動向報告など、個別やパネルでの発表が可能です（ただし、未発表であること。定期大会や他地域の研究部会での既発表不可）。

1つの報告につき、発表時間は30分、討論者（コメンテーター）が付く場合は10分、質疑応答の時間は10分の予定です。

パネルについては別途考慮しますので、ご相談ください。

### 【資格】

日本ラテンアメリカ学会会員であること。または報告日までに入会申請書を提出していること。

#### 【報告申込先】

10月27日（金）までに、以下の情報を担当理事の上 `kami # ask.c.u-tokyo.ac.jp` にお知らせください。（#を@に変更する）

(1) 氏名、(2) 所属、(3) 論題、(4) 200字程度の発表要旨、(5) 討論者（コメンテーター）を希望する場合は、その氏名とメールアドレス。

（会員に限ります。交渉は担当理事が行いますので、発表希望者の方がその方の承諾を得ておく必要はありません）

東日本研究部会  
担当理事 上英明／田村梨花  
運営委員 長村裕佳子

#### 〈中部日本研究部会〉

日本ラテンアメリカ学会中部日本研究部会では、以下の要領で研究会を開催いたします。

つきましては、研究報告を募りますので、ご応募ください。Zoomによるオンライン開催となります。発表プログラムおよびZoomのリンクは開催日1か月前を目途に学会から会員あてメールでお知らせします。

#### 【日時】

2023年12月16日（土）13:30～16:30

#### 【報告申込先】

以下の情報を担当理事の小池 `koike-ys # for.aichi-pu.ac.jp` にお知らせください。（#を@に変更する）

(1) 氏名、(2) 所属、(3) 論題、(4) 200字程度の発表要旨、(5) 討論者（コメンテーター）を希望する場合はその氏名（会員に限る）を以下へ連絡してください（申し込み者が3名に達した時点で締め切り）。

中部日本研究部会  
担当理事 小池康弘／浅香幸枝  
運営委員 丹羽悦子

#### 〈西日本研究部会〉

日本ラテンアメリカ学会西日本研究部会では、2023年11月11日（土）15時よりZoomによるオンライン開催を予定しておりましたが、報告申込者がなく順延いたします。

改めて、2024年2月の開催を予定しております。詳細は追って学会HPでお知らせいたします。

西日本研究部会  
担当理事 宇佐見耕一／北條ゆかり  
運営委員 安保寛尚

#### 4. 『ラテンアメリカ研究年報』第44号の原稿募集について

年報は第44号より電子化されます。また、これまで年1回であった締切を、年4回（9月末、12月末、3月末、6月末）とし、順次、査読を行い、掲載が決まった論文からJ-Stageにて公開いたします。次回原稿締切は12月末です。若手から中堅、ベテランまで、多くの会員からの活発な投稿をお待ちしています。

## 5. 新刊書紹介

山田篤美

『真珠と大航海時代——「海の宝石」の産業とグローバル市場』  
山川出版社、2022年、288頁（紹介者：岸下卓史 拓殖大学他）

本書は大航海時代を主導したスペインとポルトガルが真珠の取引に対して及ぼしたグローバルな影響をめぐる研究である。ヨーロッパが世界を席卷する端緒となった大航海時代を扱う研究はこれまで多数行われてきている。だが、真珠を主題に据えてこの時代をオルタナティブな視点から明らかにした研究はほとんど行われておらず、本書はユニークな試みである。

著者はウォーラステインのような歴史学者を引用し、真珠が従来の歴史研究では顧みられず、その理由として高価な割に微細であり、密輸の対象になり易いがゆえに取引記録に残らず、実証が困難と避けられてきたことを挙げる。他にも、真珠を含む漁場で産み出される水産資源への関心の低さ、養殖真珠の登場によって天然真珠の重要性が忘れ去られたことがあると述べる。実際には、フィレンツェの美術館にある肖像画でエリザベス女王が「真珠の髪飾りをつけ、真珠のロングネックレスを何連もかけ、真珠やダイヤモンド、ルビーなどの宝石をちりばめた豪華なドレスを着用している」(p.3) ことから、その重要性は明らかだ。

方法的な立場についての筆者の説明を紹介すると、水産学的な視点からアコヤ真珠を重視し、クロチョウ真珠、シロチョウ真珠といった一般的なイメージから外れた特殊なものも含め、生息する分布海域を区別して話を展開している。経済学的な視点では、真珠の生産、流通、消費を描き出すためそれぞれ「真珠生産圏」、「ハブ・アンド・スポーク取引」、「伝統的希求地」というオリジナルの概念を設定し、真珠のグローバル取引を記述している。

真珠のグローバル市場を主題に据え、南米カリブ海、ベルシア湾、マンナール湾を三大真珠生産圏としながら、南アジアから中東を経て南アメリカの北岸に及ぶ広大なエリアを視野に取めた研究であるが、スペイン語圏のアメリカ地域と縁のある評者としては、カリブ海とマンナール湾の潜水労働者が辿った運命の対比が印象に残った。著者によると、「インディオはカヌーに乗せられ、水深三〜四エスタード（約五.九〜七.八メートル）の沖に連れていかれる。そこで海に飛び込むよう命じられる。インディオは海底まで潜り、真珠の入った貝を集める。水面に現れて息継ぎなどでぐずぐずしていると、スペイン人の獄吏から早く潜るよう棒で殴られる。（中略）インディオが水中へ潜ったまま再び姿を現さないこともあるが、それはすっかり疲れ果てて、そのまま溺れてしまったか、海の獣に殺されたり、呑み込まれたりするからだ」(p.70)。他方のマンナール湾の真珠採取に関する描写であるが、「一日の仕事が完了すれば、国王の補佐官にして擁護者たる指揮官と兵士たち、ならびに潜水夫ら全員が集合して、その日に採取した真珠をそれぞれの分に応じて山分けする。最初の一山はまず国王に、次の一山は指揮官と兵士らに、その次はイエズス会修道士らに、そして残りは潜水夫らに。配分は厳重な監視と公正のもとにおこなわれる」(pp.176-7)。

ポルトガルとスペインの植民地支配を対比した以上の描写から、地元の複雑な権力関係のなかで暮らすインド人と相対的に産業の未発達な環境で生きる西「インド人」が、外部勢力から政治・経済的に干渉される際に正反対の環境に置かれていたことが分かる。インドのマンナール湾近郊の潜水夫たちは元から真珠採取を生業とする者たちであり、真珠目当てに布教活動するイエズス会と共生関係にあった。その一方で西インドの潜水夫はラス・カサスのような人物によって擁護される以外、何からも保護されずに奴隷労働を強いられていた。グローバル化による格差が拡大する昨今、構造的な問題に敏感になることがいかに重要かを、本書は語っているようにも思えるのである。



イタマル・ヴィエイラ・ジュニオール（武田千香、江口佳子訳）  
『曲がった鋤』  
水声社、2023年、322頁（紹介者：洲崎圭子 お茶の水女子大学）

ブラジルは雄大だ。多様性に富んだ気候風土のもと、広大な土地にさまざまな植生を有している。本書においては、そこに暮らす人々と多くの動植物が共生している様子が丹念に描写される。登場人物たちは旱魃や洪水も経験するなど、自然に大きく左右される人生を送る。ブラジル北東部の風景描写とともに本書を読み進むにつれ、読む側の五感が活性化し始める。筆者には、果てしなく続くブラジルの大地をすすむ長距離バスの車窓と爽やかな風が蘇り、アマゾンの奥地の村で食したアサイー果汁の新鮮な香りが漂ってくる。たとえ現地を訪れたことがなくとも、行間から立ち上がる大地の息づかいを実感することだろう。地元特有の花や鳥の名に、ポルトガル語の発音がそのままカタカナで表記され、簡潔な割注が付されている——例えば、サビア・ボステイラ [サビアの鳥]——のも、作品のイメージを広げる際に有用である。

本書が最初に刊行されたのはブラジルではなく、2018年にポルトガルでレヤ賞を受賞した翌年にまずレヤ社から受賞作品として出版された。同じ年にブラジルでも出版され、2020年にブラジルの主要な文学賞であるジャブチ賞とオセアーノ賞をダブル受賞して話題になった。著者はブラジル、バイーア州都サルヴァドール出身のイタマル・ヴィエイラ・ジュニオール。1979年生まれで、バイーア州の先住民とアフリカ出身の黒人の先祖を持つ。地理学を修めた後、アフリカ民族学で博士号を取得、国立植民農地改革院（INCRA）にも勤務した。小説の舞台である同州奥地での駐在経験があるため、この作品は同地での経験が土台になっていると、2023年4月の来日時に語っている。本書では、土地に根付く宗教行事ジャレの実践が丁寧に描かれる。そうした様子は、フィールド先で見聞きしたことや出会った人々をモデルにとっているからである。

物語では、20世紀後半、代々、白人地主が所有する大農場で農民たちのほとんどが奴隷の子孫として、居住権と引き換えに労働力を提供する奴隷同然の状態に置かれている様子が語られる。黒い肌を持ち、この地で暮らす姉妹ビビアーナとペロニージアが、各々第一部と第二部の語り手となる。幼少時、祖母が隠していたナイフを見つけて舌にあてがったことから、妹は舌を失い、姉は妹の失われた声の代弁者となる。姉妹の父親は、精霊を呼び出す能力を有するジャレの祭司兼治療師であり、農民たちのまとめ役でもあった。妹が生まれた土地にとどまる他方で、姉ビビアーナは引っ越してきた従兄と結婚しいったん農場を離れる。だが若い夫婦は時を置かずには舞い戻り、農場の労働環境の改善と改革のために立ち上がる。そして、軋轢は悲劇を生む。声と沈黙、豊穡と不毛、都市と地方といった対立項は、姉妹の関係を特徴づけるものでもある。第三部においては、すべてを知る精霊が語り手となる。その語り手が次々と明るみに出す家族や土地の歴史についての描写は、『ペドロ・パラモ』や『百年の孤独』を彷彿とさせる。

本書のタイトルである「曲がった鋤」は、主人公たちの祖先が土を耕す際に使用していた道具であり、未だ完全には消滅していない奴隷制の状態を象徴するものである。農民と地主間の政治闘争をも扱う本書は、人種、階級、奴隷制の負の遺産といった壮大なテーマを軸に、語り手を女性に据えることでジェンダーの観点が加味されることとなり、人種差別と家父長制下で最も弱い立場にある黒人女性の状況を前景化させることに成功している。

谷口智子編

『タキ・オンコイ踊る病：植民地ペルーにおけるシャーマニズム、鉱山労働、水銀汚染』  
春風社、2023年、328頁（紹介者：神崎隼人 大阪大学附属図書館）

本書は「1560～70年代のワマンガ地方で起こったタキ・オンコイは、ワンカベリカ水銀鉱山での鉱山労働における水銀中毒だった」（p.304）という「タキ・オンコイ水銀中毒説」の可能性に関して歴史学・医療人類学・環境化学・宗教学の立場から論じた書である。

「タキ・オンコイ」とはケチュア語で、「タキ」が「歌い踊る」、「オンコイ」が「病」を意味し、編者は「踊る病」と訳出している。しかしそれは病名ではなく、タキ・オンコイとは、「スペイン統治下の16世紀ペルーのワマンガ地方（現在のアヤクチュオ県）で開発された水銀鉱山のparasやワンカベリカで起こった先住民の反乱の名称である」（p.16）。

タキ・オンコイは1564年にスペイン人司祭オルベラによる報告に見られた後、1569～1584年に司祭アルボルノスの『功績報告書』による詳細な記録の中に記載されていた。その記録をペルーの人類学者ミリョーネスが発見し発表すると、1960年代以降、タキ・オンコイはキリスト教に対抗したインディオの千年王国運動やメシアニズムとして議論されてきた（p.72）。

このような既存の議論にぶつけられる仮説こそが、「タキ・オンコイ水銀中毒説」である。この説は本書の編者・寄稿者を含む何人かの研究者によって同時期に議論されてきた。最初に説を提唱したのはアンデス経済史家真鍋周三氏であるが、本書への寄稿はない。論点の一つが、タキ・オンコイにおける水銀中毒とは有機水銀によるものだったか、または無機水銀中毒によるものだったか、という問題である。編者の谷口氏は水俣病の映像資料から強烈なインスピレーションを得ている（p.9, cf. pp.163-4）。その一方、真鍋氏や本書に寄稿している水俣病研究者の中地氏が、水俣病は有機水銀中毒であるのに対して、タキ・オンコイは無機水銀中毒であろうという立場である（p.9）。

本書の内容として、谷口氏による第1章は人類と水銀の関係について宗教史の観点から、広いスケールで大胆に展開される。水銀に人を見出す聖性とシャーマニズムが論じられる。

第2章は歴史学者の立岩氏による、スペインのアルマデン水銀鉱山の歴史、そこでの労働と水銀中毒、そして植民地期ペルーとの比較が緻密に行われている。

第3章で谷口氏は、タキ・オンコイにおいて人々が囲いに入れられ、赤く顔を塗られていた状況を、塗料としての硫化水銀の関連に着目して論じている。第4章では、谷口氏と同時期に仮説を論じた医師で人類学者でもあるサンタマリア氏による、16世紀の資料の医学的観点からの検討が翻訳されている。本書の重要な論拠ともなっている。

一方で第5章では、水俣病研究者の中地氏による研究経験を踏まえた見解が簡潔に示される。中地氏は水銀鉱山での労働による健康被害は「明らかである」、水銀への暴露による障害も「想像がつく」と述べる（p.129）。前章にあった硫化水銀を塗布した場合、「体内に無機水銀を吸収し、健康障害を引き起こす可能性があることは容易に推測できる」とも述べるが、「『踊る病』という動的な健康被害は想像できず」と結論づけている（p.135）。

第6章で谷口氏は、民俗芸能「ハサミ踊り」に着目して、水銀中毒に曝されたインディオのシャーマニズム的实践によるある種の読み換えを強調する。格別に重厚なサンタマリア氏による第7章は、鉱山労働の意味をめぐるインディオの経験した歴史の変容を論じる。第8章で谷口氏は、「吸血鬼ピシュタコ」のイメージを分析し、タキ・オンコイにおける水銀中毒の水銀性悪液質の症例との類似を検討する。

このように争点を含むゆえ読者の側は留意しなくてはならないが、水俣病に谷口氏の得たインスピレーションと10年以上の探求・検証に貫かれた本書は、様々な分析の対象と観点を織り交ぜた刺激的論考である。本書には幾度となく「可能性」という言葉が見られる（cf. pp.10, 73, 87, 91, 306）が、しばしば探索的な考察も含みながら進んでいく本書はある意味でスリリングでもある。

## 6. 事務局から

入会・退会・資格変更（第176回 理事会承認）

〈入会〉3名

〈退会〉3名

〈会員種別変更〉1名（正会員→シニア会員）

### 編集後記

まずは会報の原稿を執筆して下さった会員の皆様に、心より感謝申し上げます。前号より会報が電子化されたことに伴い、端末上でも読みやすくするため、今号からはレイアウトを2段組から1段組に変更しております。

現在、イスラエルとハマスの激突に衝撃を受けつつ、1回目のアルゼンチン大統領選挙の結果を横目で見ながら、編集作業に取り組んでいるところです。今年は、大統領選挙後も混乱が収まらないグアテマラ、いわゆる「刺し違え（*muerte cruzada*）」でイレギュラーな総選挙となったエクアドル、チェーンソー片手にロックを歌う大統領候補の台頭に注目が集まったアルゼンチン等、話題に事欠きません。しかし、日本にはコアなラテンアメリカ政治ファンがいないわけではないものの、多くの場合「グアテマラってアフリカ?」「エクアドルって??」等という反応で終わってしまいます。どうすればラテンアメリカをもっと売り出せるのでしょうか。

今年は日本とペルーが外交関係を締結してから150周年にあたり、12月に上智大学でイベントが開催されます。日本人なら誰でも知っている「マチュピチュ」を利用して若年層等のラテンアメリカの認知度を高められたら良いのに、と感じております。

### 会費納入のお願い

学会会費を未納の方は、下記の郵便振替口座にご送金願います。会費を連続して2年間、無届で滞納した場合は除名となることがあります。なお、納入状況は学会ウェブサイトの「マイページ」で確認することが可能です。

口座記号番号：00140-7-482043

加入者名：日本ラテンアメリカ学会

日本ラテンアメリカ学会 No.142

2023年11月30日発行

学会事務局

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

東京外国語大学世界言語社会教育センター

舩方周一郎研究室気付

042-330-5261 ajel.jalas@gmail.com